

ヴィクトリア朝の小説に見られる子ども

ーディケンズ『大いなる遺産』・ハーディ『日陰者ジュード』ー

丹 羽 正 子

序

ヴィクトリアが18歳で女王となったのは1837年であった。ここに始まるヴィクトリア朝は、ロマン派時代のエネルギーが徐々に弱まりをみせ、摂政時代の放蕩、贅沢と、産業革命がもたらしたみじめさが対比された時期である。一方、印刷術が発達し、識字率も向上、中産階級の台頭で読書が大きな娯楽となった。電信、電話、鉄道の発達とともに時間の意識も変わり、人々に繁栄と安定の精神が芽生える。1851年の大博覧会に象徴されるように世界の富がイギリスに集中し、世界各地に植民地を有し物質的繁栄を謳歌した時代である。中産階級は19世紀を通して増大を続け自らの力で身分を上げる可能性を秘めていたが、同時に新しい世の中に対する懐疑、不安の気分が広がっていった。産業革命の影響による物質重視の結果、人々の間には革命以前の田園世界への欲求が生まれ、純粹無垢な子どもが文明に相反するものとしての自然、人間本来のあるべき姿の象徴となった。本稿ではヴィクトリア朝中期、後期の代表作家、チャールズ・ディケンズとトマス・ハーディを取り上げ、代表作『大いなる遺産』と『日陰者ジュード』のコンテクストを追い、それぞれの作品に表れる作者の子ども観と教育観を対照させながら考察を試みる。

I 『大いなる遺産』(1860)のピップ／『日陰者ジュード』(1895)のジュード

(1) 幼児時代

ピップはディケンズの他の作品、『オリヴァー・トウィスト』、『デイヴィッド・コパフィールド』の主人公と同じように孤児として登場する。自分でもピップとは明瞭に発音できないほどの幼児（年齢ははっきり書かれていないが、おそらく10歳程度であろう）である。両親の他4人の兄弟も病気で失い、全員が自宅近くの墓地に埋葬されており、20歳も年上の姉には幼児虐待と思われるような扱いを受けながら暮らしている。自分と血のつながった姉でありながら彼女をミセス・ジョーと作者が呼ぶところにピップと姉との愛の無いつながりが読み取れる。一方ピップは大きくなったら年季奉公人になる予定の現在の父ミスター・ジョーをこよなく愛している。教会の書記のウォプスルさん、かれの大伯母さんの孫娘ビディ、車大工のハッブルさん、ジョーの叔父で近所の町の裕福な穀物商のパンブルチュックさん、皆ピップの将来を心配している様子がいたるところに読みとれる。

物語はクリスマス前夜ピップが両親、兄弟が眠る墓地を訪れた時、脱獄船から逃げ出した恐ろしい形相のマグウィッチに会い彼を助けるため足かせを切るやすりと食べ物を家から盗み出すところから始まる。ピップは盗みを働いてしまったという良心の呵責より、自分の命をとられるかもしれない

という恐怖心からマグウィッチを助けることに必死となるのだが、ピップの善良さはそれらを運んでいく途中にふっとあらわれた牡牛への台詞に表れている。

「よおう！泥棒小僧」白い三角巾をつけた一頭の黒い牡牛—それは眼ざまされた私の良心には、
なにかしら坊さんみたいに思えた（p30）

この事件以来ピップは盗みを犯し脱獄者を助けたという罪の意識に絶えず苦しめられる。実はこのマグウィッチが彼に大きな遺産を与えることになる張本人となることは知らずに。

『日陰者ジュード』は、道徳律が厳しかったヴィクトリア朝社会でグランディズム（注1）の非難の的となり、この小説を最後に筆を折ることになったハーディの最後の小説である。主人公ジュードもピップとだいたい同年齢の11歳。やはり孤児で兄弟もなく大伯母ドルシラに引き取られている。ピップも時折していたようにジュードの主な仕事は畑の鳥追だった。地方の夜学の先生であり尊敬していたフィロットソン先生が学位をとるためにクライストミンスター（実名オックスフォード）へと旅立つ別れの場面から始まる。先生は「動物にはやさしくしろよ。できるだけ本を読め」と教え、ジュードにはただ一人の頼れる人物であった。彼との別れがすでにジュードの悲劇を暗示しているようである。鳥威しの仕事をしながらも、追い払われるカラスを見て自分と同じようによけいもの扱いされて生きている鳥の存在と自分の境遇の哀れさを重ねあわせ、少年ジュードは鳥威しを止めた。しかしこれが農場主を怒らせることになり失職してしまう。以来先生のいるクライストミンスターの灯りを見ながら黙々と独学に励む。それもラテン語、ギリシャ語の古本である。パンを売りながら今は死語となったこれらの言語習得に没頭し、日曜日には近くのあらゆる教会を訪ね19世紀の真鍮板や墓石に刻まれたラテン語の碑文を判読した。やがて砂岩細工の石工としてまず働こうと決意し19歳を迎える。ピップがウォプスル大伯母さんの遊びがてらの勉強をしていたのとは非常に異なり、寝る間も惜しんでの猛勉強であったが、ギリシャ語、ラテン語の独学がかえってクライストミンスターの人々との格差を痛感させることになり、いっそ生まれてこなければ良かったとまで思い悩むようになる。

（2） ピップのミス・ハヴィシャム、エステラとの出会い／ジュードのアラベラとの出会い

ピップはパンブルチュックのはからいで、大きな屋敷に住む老嬢ミス・ハヴィシャムの退屈しのぎのお相手に行くことになる。21年間脱いだことの無い白い（今は黄ばんだ）花嫁衣裳をまとい首や手は宝石で輝いていたもののしぼんだ骨と皮ばかりの身体を前にして、ピップはマグウィッチに会った時と同じような衝撃を受けたに違いない。またミス・ハヴィシャムの養女エステラとの出会いはピップに労働者の身分をいやというほど実感させ、この時以来思い知らされた階級の違いは、生涯彼に紳士になることへの絶えざる欲求を抱かせることになる。ざらざらした手、どた靴を下品な品物とみなすと同時に愛情いっぱいジョーでさえ、もっと紳士であつたらと思うようになるのだ。彼の感じた侮辱と憤りはピップの紳士になりたいという願望の引き金となっていく。彼の気持ちを察するようにディケンズは子どもの育つ環境とその影響について次のように述べている。

子ども達がだれの手で育てられようと、彼らが生きている小さな世界では、不正ほど鋭敏に知覚され、鋭く感じられるものはない。子供は、小さな不正にしかさらされないかもしれない。だ

が子供は小さいものであり、その世界も小さいものである。(注2)

ディケンズはピップの臆病さ、敏感な気質は姉の育て方に因ることを前面におしだして述べている一方、ジョーに関しては、徐々に自分の境遇に疑問をもっていくピップに対して、彼がピップの本当の友達としてまっすぐに生きていくことの重要性を説くという対照的な描写をしている。しかし上流階級の存在、自らの育ちの現実を知ってしまったピップには後戻りはできない。徒弟生活に入ったピップであったが鍛冶屋の修行を嫌い自分の家を恥じる生活となってしまった。みじめな小さな大伯母さんの店をきりもりしている健康で優しいビディに「紳士になりたい」と打ち明けエステラを慕っていることを告白する。エステラとの出会いは美しい無垢な少年時代との訣別を意味する。

一方ジュードのほうはすでに19歳。クライストミンスターへの想いはつのるばかりで、神学博士になるまで勉強は止めないと夢実現のため勉学に没頭する毎日であったが、ふとしたことで若い娘3人と出会いその中のアラベラという肉感的な女性にひかれていく。ジュードには異性や結婚についての確なアドバイスを与えてくれる親、兄弟友人など誰もいない。2ヶ月ほど後、彼女の企みにより結婚することになる。それは彼女が妊娠したと偽ったこともあるのだが、彼は一時的に本能に従っただけの理由で結婚するはめになったのはなぜなのかと自分の運命をのろう。彼らの仕事である屠殺はジュードには餌をやって育てた生き物を自分の手で殺すという気の遠くなるような仕事であった。彼らの結婚生活は破綻しアラベラは両親とともにオーストラリアへ旅立つ。ジュードはまだクライストミンスターに憧れてはいたが、アラベラと結婚したという事実がこの小説の最後まで響いてくるのである。ジュードは独学の労働者というヴィクトリア朝の典型であろう。またアラベラは労働者階級の女性は結婚でしか生計の道を得られなかったというヴィクトリア朝の犠牲者でもある。

ピップが会ったエステラはピップが現実を認識することに貢献し夢成就への希望の星であったのに対し、アラベラはジュードの大望をくじけさせる存在であった。

(3) ピップの遺産相続とロンドン生活／ジュードのクライストミンスター生活及びスーとの出会いと彼女との奇妙な結婚生活

ピップ:

徒弟生活4年目に『大いなる遺産』の2番目のクライマックスがやってくる。(1番目は遺産を相続してくれた人を知る時ではないか) いきなり弁護士ジャガーズが訪ねてきてピップが大身代を相続する旨を告げる。お金持ちの紳士になれるという野望は突然の幸運から果たされるようであった。新しい服に身を包み喜び勇んでロンドンに向かうピップの心は夢と希望で満たされていた。若者にとり当時ロンドンに行くことは偉大な夢を実現することであり歓喜に胸をおどらせていたにちがいない。草をはむ牛の群れ、堤や水門を通りすぎることは、単調な少年時代への別れにしかすぎず、田舎暮らしに未練のないピップの気持ちは「さらば」というあっさりとした一言に表れている。しかしながらディケンズはここでもピップに一抹の悲しさと不安の気持ちを感じさせることにより読者にも不吉な予感を与えている。自分が紳士になったらジョーの生活も変えてあげられるという願望も持ちながら、ジョーやビディと別れることに対してピップは別れの寂しさを感じているのである。

輝かしい幸運の一夜がいまだかつて知らないほどの孤独な夜であることを・・・私は燈火を消し

て床の中にもぐりこんだ。それはいまは、不安な床となってしまった。もはや私はこの床の中で、二度と昔のようにぐっすりと熟睡することはなかった。(上巻 p261)

当時のロンドン下町の情景はピップの期待に反して故郷の墓場を思い起こさせるようで、陰気で不浄な荒廃した町であったが、ここで出会う同室の友人ハーバート・ポケット、友人の一人ベントリー・ドラムルについて述べる。

まずピップの生涯の親友となるのがハーバートである。『日陰者ジュード』のジュードと比較して何が違うかと言えば、ピップには彼と危機を共有してくれる親友がいることであろう。ジュードには彼を支えたり心配してくれる友の存在が全くみあたらないのである。ハーバートは率直で気安く、田舎出のピップに紳士としての食事のマナーから勉強の仕方、将来の夢など彼の進んでいく道のあらゆる障害を取り除いてくれたのである。ピップのロンドンでの勉強の支援はおもにポケット氏によりなされるがここでポケット氏のことをすこし述べる必要がある。ハーバートの父ポケット氏はハローとケンブリッジで教育を受けたのだが、ここでもディケンズの貴族階級への皮肉が垣間見られる。まずヴィクトリア朝の貴族階級の婚姻についてであるが、妻、ミセス・ポケットの父はナイト(勲爵士)であり彼女が揺り籠の中にいる時から有爵者と婚姻すべきものとして育てられたが、ポケット氏が爵位を得られなかったのに結婚してしまった。ポケット氏は多くの道楽息子(父親が有力な人物)の詰め込み勉強を指導していたらしいがその仕事にうんざりしてロンドンに出てきた。つまり彼にとって紳士たちの勉強相手をしながら彼らの面倒をみるという生活は安易なものではなかったことが窺える。貴族の生活とはいいいながら大きな屋敷を維持していかなければならない苦勞も述べられている。

その道楽息子の一人ベントリー・ドラムルはサマセット州の素封家の生まれで准男爵の3番目の世継ぎであるものの、むっつりとしていて怠惰で高慢、けちんぼうで打ち解けないし、猜疑心が強いとディケンズの描写はととても手厳しい。彼が後エステラと結婚することになるとは誰が想像するであろうか。仲間のひとり、スタートップも母親にあまやかされて育った頼りにならない人物で明らかにハーバートとは対照的な人物として描かれている。

こんな状況下でピップは自分を教育していくが、ぜいたくな生活による浪費癖がついていく。エステラへの愛情は益々つり、鍛冶屋の子として軽蔑されたことも忘れ現在の状況なら彼女にもう一度自分のほうへ興味を向けさせることができると思うようになる。そのときのピップは優しかった田舎者のジョーをお金という手段を使ってさえも自分に寄せつけないようにしようという卑劣な考えまで持つようになる。

彼らは「杜のひわ」というクラブに入った。半月ごとにぜいたく千万な食事をし、仲間同士喧嘩をする会であり、ベントリーも馬車で町角にあるポストをたたき割るなど、今の若者の無差別暴力のようなこともしでかす。ピップとハーバートがする唯一の仕事は彼らの債務を紙に書き付けるということであった。

ミセス・ジョー・ガージャリーの死の知らせを受け故郷にもどったピップは再びジョーとビディの純朴さに触れることになる。また、生活のためにビディが教師になることを聞く。子どもたちを教えながら自分も成長しようとして地道に努力しているビディの姿は都会の紳士の放蕩生活となんと対照的に描かれていることか。

ジュード:

ジュードは年季奉公を勤め上げ、長年憧れつづけてきたクライストミンスターに来る。暗闇の中、学寮を通り過ぎて行くと目の前には多くの詩人、哲学者、政治家、聖職者が次々と現れてくるように思えた。ジュードにはピップのような財産があるわけではないし、勉学の道より毎日の生活の糧を稼がなければならないという生活の重圧がかかっている。この街には、いとこのスーが住んでいることを以前から知っておりすぐにでも会いたくなるがまずは仕事を探さなければならない。大伯母から送ってきたスーの写真を毎日見ながら学寮の間を歩き回る。しかしやがて、憧れの町は自分との隔たりが大きいことを悟る。彼は具体的なプランを全くたてないまま、学問の府へ自分の身を置きたいという憧れだけで移り住んだ。それは「生きるにあたいしない」という思いにとらわれた根無し草が自分のアイデンティティーを探す旅であった。ピップにはハーバート、ウィミックなど相談できる人が存在するが、ジュードにはまったくの孤独がまちうけていた。スーは教会関係の品物の販売店で働く美しい女性であることがわかるが、気後れもし、大伯母から彼女に近づくことを禁止されていたこともあって、会うこともままならなかった。ある日、ジュードが石工として働いている教会にスーが訪ねてくる。二人でフィロットソンを訪ねるが学位をとることはあきらめ、都会から離れた田舎の小学校の校長となっていた。ここでジュードは、理想的存在であったフィロットソンの挫折を知る。ちょうどスーは失職していたし、ロンドンで教職に就いていた経験もあり、フィロットソンの下で働くことになった。ジュードはフィロットソンとスーが親しくなり彼がスーを慕うようになっていることを知り、内心穏やかでなくなる。やがてスーはメルチェスター（現在のサリズベリー）の教員養成所を出たらフィロットソンと結婚するという約束をしてしまう。スーはその養成所で門限までに帰寮しなかったことで一人部屋に監禁されるがそこから逃げ出す。学校は退学となるがジュードにとっては一番近い存在となってくる。一方フィロットソンはシャストンの男子校の教師となっている。婚礼の日、式が終わるとスーは何かものを言いたげな様子で眼に涙をためたまま夫と旅立っていく。傷心のジュードは酒場へ行き偶然アラベラと再会する。彼女はオーストラリアで再婚していた。ジュードはスーと大伯母の病氣見舞いにメアリーグリーンへ行くが彼女はフィロットソンと「結婚すべきでなかった」と打ち明ける。アラベラは現在の夫とロンドンに住むことになる。ジュードがスーを訪ねると、彼女から、フィロットソンは友人として好きだが結婚生活は一種の拷問だと打ち明けられる。別れ際に2人は熱い接吻を交わした。このようにして彼女を愛しつづけることは、聖職者になろうとするジュードには許されないことと悟りその日の夕方、彼は神学に関する本を焼き捨てる。スーはまだフィロットソンとは本当の夫婦になれず物入れに寝る毎日であった。そんなスーからの別居の申し出をフィロットソンは受け入れる。この結果彼は免職になり病床についてしまう。彼はジュードと彼女が結婚できるよう自由にしてあげたいと友人ギリガムに話す。

（4）マグウィッチの登場と逃亡計画／Little Father Time の出現

ピップ:

ハーバートも出かけたある嵐の陰気な夜、階段にひきずるような足音がした後、筋骨たくましい60歳がらみの男が訪ねてくる。この小説のクライマックスである。ピップをみじめな鍛冶屋生活から救い、安楽に暮らせるように財産を譲ってくれたのは、彼が幼少時、沼地で助けた脱獄囚であることが判明するのである。彼が相続した財産はミス・ハヴィッシュからではなく、数々の罪を犯した囚人マ

グウィッチからのものであったことは読者にも衝撃であったであろう。「わしがおまえを紳士にしたんだ」と繰り返すマグウィッチに初めは憎悪と嫌悪しか感じなかったピップであるが、次第に彼は彼が一生を自分に託してくれたこと、そして命を賭して会にきてくれたことなどを考えはじめ、どうか彼を国外へ逃亡させようとハーバートと計画するのである。ディケンズはここでも優しい人間性を失っていないピップと彼の成長とをみごとに描いている。ピップが一番に考えたことは自分の財産がこれからどうなるかということではなく、このままでは縛り首になるかもしれない目の前の脱獄囚の行為のために、結果的に優しいジョーを捨てたのだという悔恨の情であったし、彼がジョーやビディの単純さと誠実さを懐かしく思い出すことでピップの内面がロンドンの生活の中でも失われていないことを強調しているのである。

ディケンズは、あらゆる罪を犯し牢屋を出入りし、枷をはめられたり鞭で叩かれたりする一生を送ってきたマグウィッチと、彼を道具として使っていたコンペysonを対照的に描いている。私立の寄宿学校出で学問があり口もうまく上流の人間のまねの名人だったコンペyson。詐欺、銀行手形の流用などをたくらみマグウィッチを奴隷のように危ない目にあわせていたことを描くことにより、学問をしていたかどうか人間性にはなんの影響もあたえないことをここでも強調しているように思える。

ハーバートと協力して船を使いなんとか逃亡は成功するかにみえたがコンペysonの追撃で失敗し、マグウィッチは怪我をしてまた投獄される。しかしこんな姿を見てもピップは次のように感じる。

彼に対する嫌悪の情は、いまはあとかたもなく消え去ってしまっていたからであり、そしてわたしは、いまわたしの手を握っている、この狩りたてられ、傷つけられ、枷まではめられた男のうちに、ただただ、私の恩恵者となろうと考えてくれた人間、何年ものあいだ、わたしにたいしてすこしもかわらぬ愛情と感謝と寛容をいだいてくれた人間だけを見たからである。(下巻 p 366)

ピップが真の紳士になれた瞬間であろう。マグウィッチは「わしの息子よ」と言いながら大昔に別れた娘がエステラという貴婦人になって生きているというピップの言葉とともに死んでいく。

ジュード：

アラベラから便りがありジュードと彼女の間には子どもが1人おり再婚するため引き取ってほしいと書かれてあった。ジュードたちはまだ正式な結婚式をしていなかったがともに暮らし始めていたので承知して子どもの到着を待った。列車から降りてきた少年はどんな子どもであったか。

彼は「少年」の顔をした「老年」であった。しかもその仮装がとてもまずいので時々彼の真の姿(老年)が裂け目から、覗くのであった。常夜の太古から押し寄せる大うねりが時折生命の朝にあるこの子供を乗せるように見え、その時彼の顔は振り返って「時」の大洋を眺め返すが、目についたものを気にとめる様子ではなかった。(p 407)

彼はもし命を落としても葬式の費用がかからないようにと名前も付けてもらえなかった子どもである。幼年時代の希望などとは無縁の子どもとして描かれている。こんな子を預かるのなら結婚式をしなければと登記所にでかけるがまだ結婚の決心がつかない。

(5) ピップ、生まれ故郷へ戻る／ジュード、再びクライストミンスターへ

ピップ:

大財産を失ったピップが目覚めたのはジョーのやわらかな眼差しの中であった。彼が尊大と虚偽のロンドンでの成り上がり紳士としての生活から美しい平和に満ちた田舎へと帰郷の途についた時はちょうどジョーとビディの結婚式の日であった。ピップはすべての所持品を売り払いきるかぎり借金の返済をしてイギリスを発ちハーバートの仕事を手伝うことになった。無一文になったピップをハーバートは以前と変わらず受け入れてくれる。11年後ジョー夫妻を訪れたピップは暖炉の側に「わたし」を発見する。ジョー夫妻の子どもである。その後エステラとも再会するがその後のことは読者の想像に任されている。

ジュード:

彼らが歩く周りの人々には子ども連れの、結婚もしていない2人は奇異に見えたに違いない。ジュードの仕事も減りだす。かつては夢いっぱいでの憧れを持って訪れたクライストミンスターへ着いた時は2人の幼児、Little Father Time、とおまけにスーは次の子どもを宿しているという状況だった。なかなか宿をとれないでいる時 Little Father Time は言う。

「・・・僕はあなたの所へくるべきじゃなかったんです。—これこそ本当のことです！僕はオーストラリアであの人たちに厄介をかけ、ここでまた人さまに迷惑をかけているんです。生まれなかったらよかったになぁ！」(p492)

赤ん坊がもうすぐ生まれるということに対しても、「暮らしがもっと悪くなる。お母さんは残酷だ」と責める。翌朝スーは Little Father Time が2人の幼児を殺し自分も首を吊っているのを発見する。「僕達余計なのでやりました」という紙片が残っていた。スーは驚愕のあまり死産をする。スーはフィロットソンのところへ戻り、アラベラも再婚相手が死んだためジュードと結婚する。ジュードの体調はじょじょに悪化に向かい、アラベラが次の男性に色目をつかっている間に死の床につく。

これまで少々無謀とも思われるが2つのまったく異なる小説のプロットを忠実に追うことにより出来事、主人公の心中、係わる人間関係、作者の人物性格描写の意図などをテキストにそって比較してみた。では彼らの子ども観、教育観はこの2つの小説からどのように読みとれるであろうか。

Ⅱ ディケンズ、ハーディの子ども観・教育観

1 ディケンズの子ども観

まず初めに小説の娯楽性を重んじたディケンズは迫害される主人公が純粋で無垢でひたむきであればあるほど大衆に喜ばれることを知っていた。つまりピップがミセス・ガージャリーにサディステックに扱われれば扱われるほど彼を応援したくなり、幸福になってほしいと願う読者の気持ちを理解していた。オリヴァーが変転の末、裕福な紳士の養子になれるというおとぎばなしの要素も少し入っているのであるが、オリヴァーと違うところはディケンズはピップを成長させていることであろう。初

めは外面的な体裁で紳士を装った彼を最後には内面的紳士にしていることである。父親不在のまま家庭内暴力にさらされはしたが、最後にはジョーのキリスト教的やさしさと2番目の父マグウィッチの外面的醜さに隠れた内面の気高さを受け入れられるようになるのである。それはディケンズがまだルソー、ワーズワースの「子どもの本性は善」という考えを受けついでいるからである。ピップは子ども時代の無垢さゆえ人生の辛酸を味わい成長したのである。子どもの幸せになる権利を否定することに対し全力で抗議している作者の姿が見られる。子どもを芸術化することによりイギリス民衆の生活に密着しながら少年を英雄化し夢実現への成功物語へと導いていくのである。サミュエル・スマイルズの『セルフ・ヘルプ』は『大いなる遺産』の1年前の1859年に刊行されているが、スマイルズは人格こそ真のジェントルマンのしるしと言い、有用実践的立身出世を説いている。ディケンズはピップに代表される想像力豊かな子どもの、夢のある成長物語を描きたかったのではないか。

次にジョーが終始貧しい家の炉辺の灯を絶やさなかったことである。ここにはディケンズの家族愛への尊重が見られ、ピップが中産階級イデオロギーが根ざす「家庭」の価値に気付くことで物語が終わる。孤児のピップがマグウィッチの「お金の力で紳士は作られる」という信念である外面の成功に惑わされず、人間の本来のあるべき姿に目覚めることができたのは、帰るべきこの炉辺の灯が燃え続けていたからであろう。ここには「家庭」というロマンスが感じられる。ロマンスとはディケンズが見た現実の醜い社会に対抗する純粋な理想的世界である。孤独、貧困、虐待などの社会悪から子どもを救えるのは、つましくとも温かい血の通った家族である。この小説が世に出た時はヴィクトリア文化の最盛期であり、家庭を中心とする物語が好まれる時代であった。ジョーとビディに象徴される道徳的規範に根ざした明るい楽園である家庭に帰れて初めて、ピップは失われた無垢な少年時代を記憶に留めながら自分の痛みを知ることによって他者の痛みを知る成年へと成長している。

2 ディケンズの教育観

ウォプスルさんの大伯母さんは村で夜学の塾を経営しているが、『大いなる遺産』第10章にはこの当時の田舎の子どもたちの教育がどんなにいい加減になされていたかが描かれている。ほとんど子どもたちがただ集まって騒いで遊んでいる状態で、あとは印刷不鮮明の聖書を回し読みする程度であったようだ。なにしろ教室が彼女の居間兼寝室だったのだから。しかしピップはビディの助けにより苦心しながらアルファベット、読み書き、計算などができるようになる。父が大酒のみで暴力的であり文字を書くような環境には無縁だったジョーにはそんなピップの博学は奇跡と見えたにちがいない。

ヴィクトリア朝のイギリス社会は学校の問題と多くのかかわりを持たざるを得なかった。1868年にパブリックスクール法は二つの重要性を持っているとブリッグスは述べている。(注3)

- 1 「ジェントルマン」というサミュエル・スマイルズの自助の英雄たちとははっきり異なるタイプの人間を生み出したこと

- 2 そこにおいて古くからの家系の代表者と新しい中流階級の師弟とが入り混じったこと

ディケンズも教育改革者としてはイギリスにおいて最大の人物であるが、彼もパブリックスクールについては等級、地位、あるいは富に汲々としている人間は一人もいないし、こんな場所はイギリスの中ではパブリックスクールを措いてはほかにないという見方をしている。

彼は自伝の中で12歳の時、借財のため妻子ぐるみの拘置所暮らしも経験し、学校も退学させられるという辛い経験を持ち、靴墨工場で働いた時の辛い時期を次のように述べている。

才能があり、活発で熱心で、繊細で肉体的にも傷つきやすい子ども— どんなありふれた学校でもいい、学校さえ行けば、たいせつなものが痛められずに済んだかもしれない。…あの靴墨工場での同僚との付き合いの中で、誰にも打ち明けられない私の苦しみがどんなものであったか言い表す言葉がない。…（注4）

彼の「学問のある優れた人間」になりたいという欲求は学校へ行かせてもらえなかったことにより増長しているように思える。その後裁判記録の速記者、新聞の議会記者として議会討論を速記、報道するなど文筆の才能を伸ばしていったのであり、教育の場を15歳で去っていたとしても後悔の様子はないようである。なぜなら9人の息子たちにも10代半ばで世間に出て行くように薦めている。『ディケンズと教育』においてコリンズはディケンズがヨークシャーの教育現場を視察し学校の諸問題をつぶさに見て統計調査を行い文芸上のヒントを得たことを述べ、彼の憤慨は正当性のあるものだとしている。彼は小説における娯楽性とともな道德性を目指し現実にある問題を芸術的目的と結合させ読者に露呈させたのである。学校の記述の例として『デイヴィッド・コパフィールド』のセイレムハウスの次の描写を紹介しよう。

虐待が公然とまかりとおる学校では、牛耳っているのが頼馬だろうがそうでなかろうが、教えてもらえることはどうせ高が知れている。ぼくら生徒は、だいたいのところ他の学校の生徒と同程度に物を知らなかったし、それに第一勉強が手につかないほど不安におののき、虐待されてもいた。絶えず災難、苦痛、そして不安につきまといわれた生活を送るなかでは、…勉強などできやなかった。（注5）

彼の学校教育への批判は『大いなる遺産』の中では内面が貧しい人物ほど貧しい否定的な性格描写になっていることだろうか。例えば友人の1人、ベントリー・ドラムル。素封家の生まれで准男爵の3番目の世継ぎであるが、猜疑心が強い魅力のない人物である。コンペysonは私立の寄宿学校出で学問を身に付けていたにもかかわらず、マグウィッチを手先に頭脳的犯罪を犯す。

以上のことを考えあわせると、ディケンズは教育において特に学校の組織やカリキュラムにはあまり関心があったわけではなく、知的教育よりむしろ生徒達が良き英国人、良き市民になる指導に情熱を燃やしてほしいと願ったのであろう。この点においてはパブリックスクールの持つ目的の一つである「ただ単なる知育よりも人格形成がより重要な役割を持ち、試練を通じて人格の形成をし、こつこつ努力する勤勉な人が傑出した天才と同じように大切にされた、いわゆるクリスチャンジェントルマンを作ること」（注6）に当てはまるようにピップを描いたと言える。

3 ハーディの子ども観：「契約」の犠牲になるこどもたち

ヴィクトリア朝の女性の地位、役割は小説ほか多くの文学に道德的規範を示す意味で大いに係わっていた。中流階級の女性の理想像は「家庭の天使」であり、女性はいかに弱さを身にまといながら弱い器として男性より劣等だという固定観念があった。労働者階級の女性たちは男性より低賃金で雇えるということで織物産業、製造業を中心に労働を搾取され不健康な労働条件の下で働かされ20代にして老いてしまったと言われている。

福音主義は教理や礼拝よりも人々の生き方に関心をもち、仕事に尽力する活力となった。つまり自

分の尽力で魂が救われるのならこの福音主義的献身が日々自分に課せられた倫理であり自分達の生活改善の規範であったのだ。ジュードが独学で自分を高めようと奮闘する姿は痛々しいほどこの社会的規範に負っていることから推察できる。

結婚は神の前での契約であり、契約違反は社会規範からの逸脱でもあった。しかしハーディはスーにより性のテーマに真っ向から取り組み、己の意志により夫でさえも肉体関係を拒否できる女性を描いた。しかしスーの特異な性的感受性と極端な道徳的潔癖さは愛と欲望を同等に捉え、つまりは自分の身体を委ねることが恥ずべき動物的行為だと勘違いしている。ジュードは肉欲のアラベラと霊的スーとの板ばさみになり自滅への道を突き進んだ。

ジュードの憧れであり守護神であったスーが2人の子どもをもうけ、1人を養子として引き受けながらなぜ因襲に縛られ契約の世界に戻っていかなければならないのか。

『大いなる遺産』のピップにはジョーやビディなどの視点を共有する人間が存在する。彼には一度は捨てたものの時折懐かしく思い出す故郷が存在し、帰属意識が残っており、最後にはその懷に抱かれたいと願う人間が存在する。だいたい同年齢で登場する少年ジュードは初めから「ここはなんて厭なところだろう」(p20)と認識し、懐かしい故郷という感情は微塵も感じられない。さらに、先生と慕っていたフィロットソンとの別れを経験する。その上この人物が自分の愛をはばむ人となるという人生の皮肉をハーディは容赦なく描き尽くす。

『テス』においてもアレックとの間にできた私生児ソローがいるが、ハーディの作品に登場する子ども達はディケンズの作品とは対照的に女性を縛り、不幸におとしめていく存在として描かれる。Little Father Time には次のように言わせている。

「僕は要らない子どもが生まれたら、物心つかないうちに、すぐ殺すべきで、大きくなったら歩き回らせてはいけないと思うよ！」(p493)

存在を喜んでもらえないことを実感しながら育つ子どもには帰属意識が育たないであろう。Little Father Time もジュードより早く死んでしまうが、実はジュードの生まれ変わりなのである。これはハーディのエピソードとして彼が幼少の頃から自分は世界で役に立たない無用者であり、大人になりたくないという否定的な意識を抱いていた事実と無関係ではないであろう。

日向で仰向けに寝て、自分は何と無益な存在なのだろうと思いながら、彼は麦わら帽子で顔を覆った。太陽の光線が麦わらのすきを通してさし込んできた。裏ばりが無くなっていたのだ。それまで経て来たこの世の経験を思い返ししながら、彼は、大人になりたくないという結論にたった。

(注7)

実はこの箇所はジュードが故郷、メアリーグリーンで鳥威しの仕事から暇を出された時とほとんど同じ表現となっている。

ジュードは外へ出た。そして自分の存在が何の用もないものであることをこれまでよりもひしひしと感じて、豚小舎の傍の藁山に仰向けに寝た。……大人になることはいろいろの責任をもたらすものである、と彼は知った。……年をとるにつれ、時代を中心にいると感じ、子供のときのように時代の円周上の一点にいてのではないと感じる時、一種の戦慄に襲われるものだと気付い

た。・・・おとなになることが止められさえしたらなあ！彼はおとなになりたくなかった。(p26)

11歳の少年がすでに大人になること、己の未来に不安を感じ悲観的な恐れを感じているのだが、これがそのまま前述した Little Father Time の台詞に重なっている。

ジュードは死の床でも最後に訴える。

「なぜ私は生まれたときに死ななかったのか？なぜ胎から出てきて息絶えなかったのか？・・・」

(p603)

ハーディは石工の父と教育熱心な読書家の母の長男として職人階級の比較的裕福な家に生まれた。しかし彼が過ごした幼年期、青年期は物質的繁栄のかげにさまざまな矛盾（キリスト教的世界観のかげり、懐疑、不確実、不安）が渦巻いていた。彼の女性関係を述べることは紙面の都合上ここでは出来ないが彼は性的な面でコンプレックスをもっていたとされる。(注8) 彼には姉弟があったが結婚はしていないし、また彼は結婚はしたが子どもができなかった。また27歳くらいまで建築の道に進むか作家として身をたてるか迷っており、建築という確実な仕事より文学という不確実な分野で成人としての責任を果たさなければならなくなった。

以上のような見地から彼の子ども観を探ると、まず第一に彼が母親の厳しいが暖かい庇護のもとで大人になることに不安を感じいつまでも子どもでいたいという感情をもっていたこと。自己の成熟、特に男性的な面での成長の遅れにより、子どもの心理を深く理解できなかったのではないかと。もし理解できたとしてもそれは「大人になりたくない」という一面だけなのではないかと思うのである。彼の他の小説にも極端に子どもが登場しないし、登場する時は女性を縛る存在となっているからである。

第二に自分にも姉弟にも子どもがいなかったことで、彼のまわりに守るべき子どもが存在していないことなどからハーディ家が途絶えるという漠然とした悲壮感を持っていたのではないかと。これが懐疑的時代思潮と絡んで人類的な運命悲壮感と発展したのではないかと。彼には奇妙な孤独癖と引っ込み思案があった。(注9) これは第一と関連するが外界に直接係わるのではなく距離を置いて係わるのである。物事を客観的にとらえようとする態度は、建築家を目指していた頃ドーチェスターの監獄で男が絞首刑になる様を望遠鏡で長い間見守ったというエピソードにも示されている。子どもという存在も子どもの内面を探ることより結婚という契約後には子どもの誕生が許されるというような形式上の事象としてとらえているのではないかと。

第三にジュードとスーが持つことになったのは、ジョーとビディの家族のような人類存続のために自然の摂理からなる愛情の所産としてできた家族ではなく、Little Father Time を引き取ることでいわば人工的に作られた家族である。そのためには結婚という契約をしなければと思うのだが人為的な家族から愛情溢れた子どもが育まれるのであろうか。

4 ハーディーの教育観

彼の教育観を述べるに際しハーディ自身の受けた教育を少々述べなければならない。彼はジュードのように正規の教育を受けていないように思われがちだが、当時の片田舎では例外的に高い教育を受けた。1848年彼が通った学校は国教会派のヴォランタリースクールだった。教育熱心の母ジマイマはその後彼を非国教会派であるドーチェスターの学校へ送りラテン語などを習わせた。

ドーチェスター南部の教区牧師ヘンリーモウルは1854年この地方を襲ったコレラの流行に際し献身的な活動をした人であるが、その息子ホレスはオックスフォードのトリニティーコレッジやケンブリッジのクイーンズコレッジで学んだ秀才であり、後著作と批評の仕事に携わったが、彼がハーディの精神的知的な師となった。1862年ロンドンで大博覧会が開かれようとしている時建築の勉強を目指して単身でロンドンに出て、ロンドン主教のプロムフィールドの建築事務所で働き始める。彼もラグビー、ケンブリッジのトリニティーコレッジを出た有名な教会建築家であったがハーディは単調な図面引きでは物足りなくなる。ロンドンでは芝居、ダンス、歌劇、博覧会などに通い図書館で読書に耽るという都会生活を満喫した。夜間の建築作業の監督をしながらも彼の文学への夢は強くなっていった。試作と建築の両立を目指しケンブリッジに入学しようと考えたが、この頃から精力的な読書の疲れとテムズ川の汚濁からくる空気の悪さが彼の身体を不調に陥れた。次第に文学で生計をたてることを本気に考えるようになり作家生活を始める。約30年後、1895年刊行の「日陰者ジュード」が最後の長編小説となる。

教育的観点から見ればジュードは孤独の独学者、財産の無い、さして高い技術もない若者が教育により高い知識を得ようとする上での苦労と挫折を象徴している人物である。ただし眠りと余暇を削って勉学に励んだジュードではあるがクライストミンスターでの夢実現のため大学に入学するのか、あるいは将来の生計の方途についても具体的言及はなにもしていない。ハーディは理想実現にひたすら邁進するばかりで理性的思慮を欠いた無謀な性格をあえてジュードに与えることで実行の人というより夢想の人という一面を強調しているのではないか。具体的思慮に欠き自分の運命を呪いながら生きていく人間が最終的には自己責任をとり屈服していく姿をジュードに見るのである。

最後に「光の町だ」と言ったジュードの願った夢の大学について述べたい。ハーディによってよみがえったとされるウェセックス大学設立運動である。(注10)「あそこには知識の木が生えている。……我々はジュードの痛ましい失意を記憶している。将来のジュード、すなわち、熱意にあふれた、豊かな夢を抱く少年少女が、あのような失意に見舞われることがないように対策を講じる決意をすることこそハーディがウェセックスに贈っている遺産である筈だ。」(注11) 実際にはこの大学設立の夢は自然消滅してしまったが、ハーディをメンバーとする多くの人々がもう一度ジュードの夢を追いかけたという事実は、ハーディの掲げた人生の問題そのものをジュードが背負い、社会の問題と対決したことを如実に示しているのである。ハーディも万国博覧会における一つの目的であった「科学の研究と教育のためカレッジ設立の必要性を英国民が認識しない限り、英国は産業国としては衰退していくであろう」(注12) という呼びかけに答えたかったのであろう。

結 び

ヴィクトリア朝における二人の作家の代表作を比較しながら、子ども観、教育観を見てきたが、彼らの受けた教育、生きた時代、家族構成などから大きな違いが見られた。

まず、二つの作品が出版された差が35年あることは何を意味するであろうか。時代背景としては『大いなる遺産』が書かれた1860年はまだロマン派の香りの残る英国の繁栄の時代であったとともに1830年にピークに達する福音主義がまだ勢力を持っていた時代である。ディケンズは過激な社会の変

化の中、繁栄の陰にある貧困と孤独、虐待などに犠牲になる子どもを社会と子どもとの関係で描きながら最後には幸福になるという「成功物語」で読者にロマンを与えた。一方『日陰者ジュード』が出された1895年は世紀末の不安な時代であり、1870年代以降自信に溢れたヴィクトリア中期の慣行に対しての解放を求めた時代であった。その中で自分の感情と本能だけを頼りに生きようとするが、目に見えない偶発的な意志によりもてあそばれる不器用なジュードを描くことによりハーディは自分自身に内在する混沌と危機感を不気味に描きだしたのである。作者の作風があるとはいうものの、この二つの作品はちょうどヴィクトリア朝の時代背景を象徴しているとも言える。

次に子ども観はどうか。子どもを純粋な目で見ているのは両者同じなのだが、子どもを客観的に見つめるのと、付き合うのとは違う。ディケンズにとってイノセントな子どもは社会悪と果敢に戦い幸福になるロマンを保持し成長する期待を残している。それはディケンズが9人の子どもを持ちかれらの幸福を願い当時の教育に対して腐心していた願望である。子どもたちと付き合った結果の子ども観となる。この時代今日でも名作として残っている『不思議の国のアリス』『ピーター・パン』『ピーター・ラビット』など児童文学の黄金時代であったが、ディケンズの求める子どもの持つロマン性、純粋性と非常に通じるものがある。一方ヴィクトリア朝後期は都会の喧騒を嫌い田舎の田園生活への回避が起こり、まさにハーディのほとんどの作品に見られる都会対田舎、文明対自然の対比が子ども観にも顕れる。子どもは因襲に組み込まれゴシック的な残酷性を持った存在であり、希望をもち得ない余計者でしかない。ヴィクトリア朝の繁栄のかげりが背景にあるものの、ディケンズと子どもの捕らえ方が違うのは彼自身子どもと触れ合うことも少なく、ただ客観的に観察しているだけで付き合っていないからではないか。ただし現代日本における様々な子どもによる殺傷事件などが増える傾向は『日陰者ジュード』に見られる子どもの存在にも係わる諸問題に通じるところがたくさんあり、その意味でハーディは100年以上も前にすでに現代の子どもの問題を予測していたようにも思えるのである。

両者ともヴィクトリア朝以前に書かれた他の小説より圧倒的に多くの下層階級の子どもを扱い、時代に翻弄され教育より労働を強いられ物質文明の犠牲となっている子ども達を描いていること、また母性愛を受けずに育ち自らのアイデンティティーに自信が持てない不安感に苛まれる子どもに対して大いなるシンパシーをこめて描いていることはまぎれもない事実である。

注

- 1 土屋倭子『「女」という制度』南雲堂 2000 pp70-74
- 2 チャールズ・ディケンズ『大いなる遺産』上巻 山西英一訳 p112
- 3 アサ・ブリッグズ『ヴィクトリア朝の人びと』村岡健次/河村貞枝訳 ミネルヴァ書房 1988 pp187-89
- 4 ジョン・フォスター『チャールズ・ディケンズの生涯』上巻 宮崎孝一監訳 研究社 1985 p13
pp9-10 pp25-26
- 5 チャールズ・ディケンズ『デイヴィッド・コパフィールド』石塚裕子訳 岩波文庫 2002 7章 p240
- 6 アサ・ブリッグズ『ヴィクトリア朝の人びと』村岡健次/河村貞枝訳 ミネルヴァ書房 1988 pp188-90
- 7 Florence Emily Hardy: *The Life of Thomas Hardy* Vol.1 Macmillan Press 1933 p19
- 8 Robert Gitting: *Young Thomas Hardy* Heinemann London 1975 p29
- 9 鮎沢乗光『トマス・ハーディの小説の世界』開文出版 1984 p14
- 10 Wessex, cit., Vol.1. No.1 p41

11 The Times, May 25, 1925

12 The Cable Press, University of Southampton 1962 p12

***テキスト**

チャールズ・ディケンズ『大いなる遺産』上下巻 山西英一訳 新潮文庫 1951

トマス・ハーディ『日陰者ジュード』小林清一訳 (株) 千城 1988

***参考文献**

Florence Emily Hardy: *The Life of Thomas Hardy* Vol.1 Macmillan Press 1933

ラインハルト・シュトッカー『トマス・ハーディの小説における性格描写と運命形象』小田稔訳 学書房
1974

佐野晃『トマス・ハーディ』開いた精神の奇跡 冬樹社 1981

鮎沢乗光『トマス・ハーディの小説の世界』開文出版 1984

アサ・ブリッグズ『ヴィクトリア朝の人びと』村岡健次/河村貞枝訳 ミネルヴァ書房 1988

小田稔『トマス・ハーディ―翼を奪われた鳥―』篠崎書林 1990

フィリップ・コリンズ『ディケンズと教育』藤村公輝訳 山口書店 1990

松村昌家/臼田昭/井出弘之/佐野晃『ヴィクトリア朝小説における父と子』英宝社 1991

松村昌家『子どものイメージ』19世紀英米文学に見る子どもたち 英宝社 1992

松村昌家/川本静子/長島伸一/村岡健次編『民衆の文化誌』研究者 1996

安藤勝夫/東郷秀光/船山良一編『なぜ『日陰者ジュード』を読むか』英宝社 1997

富士川和男『みなし児の遍歴』ディケンズとヴィクトリア小説 桐原書店 1998

松村昌家編『大いなる遺産 ―読みと解釈―』 英宝社 1998

森松健介/玉井しょう/土岐恒二/井出弘之編『トマス・ハーディと世紀末』英宝社 1999

土屋倭子『「女」という制度』南雲堂 2000

リチャード・D・オールティック『ヴィクトリア朝の人と思想』要田圭治/大嶋浩/田中孝信訳 音羽書房鶴見書
店 2000

新野緑『小説の迷宮』ディケンズ後期小説を読む 研究社 2002

マイケル・スレイター『ディケンズの遺産』佐々木徹訳 原書房 2005

(にわ まさこ 人間文化学科)